

機関番号：34315

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2010

課題番号：21720081

研究課題名（和文） 活字活版印刷文化における文学の視覚性と身体性 萩原恭次郎と岡田龍夫を中心に

研究課題名（英文） Physicality and Visuality of Literature in the Type Printing Culture: Kyojiro Hagiwara and Tatsuo Okada.

研究代表者

村田 裕和（MURATA HIROKAZU）

立命館大学・文学部・助教

研究者番号：10449530

研究成果の概要（和文）：

萩原恭次郎と岡田龍夫が「印刷術による総合運動」と名づけた詩集『死刑宣告』（1925）について、その生成過程を調査し、それが当時の活版印刷文化の歴史的脈絡の中でどのような意味を持っていたのかを考察した。また、シンポジウムを開催して1920年代のプロレタリア芸術の諸相を再検討した。特に、美術・映画・漫画などの視覚芸術を中心に、ジャンルの境界領域において、多様な実験的活動が行われていたことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

For this project I examined the genesis and techno-historical context of the poetry collection *Death sentence (Shikei senkoku 1925)* by Kyojiro Hagiwara and Tatsuo Okada. This collection was what they termed a “combined artistic movement through typography” that joined media and genres toward a new kind of art. For one aspect of the project I held a symposium that reexamined diverse aspects of the proletarian arts in the 1920s with a focus on the visual arts such as fine art, film and manga. Through this project I highlighted the ways in which experimental activity was performed in the borders of genres.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：前衛芸術運動、タイポグラフィ、印刷文化史

1. 研究開始当初の背景

日本における前衛芸術運動（戦前期）の研究は、1990年代以降、雑誌の復刻や資料の発

掘によって飛躍的に進展している分野であった。また、大小の美術館でもさかんに企画が組まれていた。

しかし、1920年代の詩人萩原恭次郎と、彼の詩集を装幀した岡田龍夫については基礎的資料も完全ではなく、また、1920年代アヴァンギャルドの研究は、文学においては「詩」や「評論」といった従来の文学ジャンルの区分に従ったものが主であり、本詩集もその中でのみ論じられてきた。

特に、雑誌や商業ポスターなどでも多用されているタイポグラフィは、われわれの日常に浸透している重要なジャンルでありながら挿絵や装丁などとともに研究領域の谷間となっていた。

2. 研究の目的

萩原恭次郎と岡田龍夫によって作られた詩集『死刑宣告』は、本文全体に活字のサイズ変更や、リノカットと呼ばれる版画図形が挿入されている。こうした詩集におけるタイポグラフィは、活字という文化制度を相対化させずにはおかない。植字を失敗したページが、かえって植字工の労働を生々しく読み手に想起させるように、知的な制度は、普段はそうした人々の肉体労働を意識しないで済むように構成されていた。さまざまな視点から文化の総合的な検討を行い、詩・装丁・労働・美のはざまにゆらめく人間の多様な「生」のあり様を明らかにすることが必要となる。

戦前期（特に1920年代）のアヴァンギャルドの芸術性が、現在のモダン・アートやプロダクト・デザインに直結するものであり、生活に密着したレベルで今もなお新鮮な刺激をもたらしている。そうした中で、萩原恭次郎と岡田龍夫が示した活字印刷文化の限界と可能性を考える意義は大きい。

本研究では、従来、「モダニズム文学」「プロレタリア文学」としてジャンル区分されてきた領域を見直し、現代的な問題意識からあらたな視座を構築することを目的とする。

3. 研究の方法

萩原恭次郎原資料の調査・検証

第一に萩原恭次郎の原稿類の調査をおこなう。原稿類は主として群馬県立土屋文明記念文学館に収められ、一部が前橋市立文学館

などに寄託されている。後者には全集未収録の詩稿や自筆年譜が含まれている。前者についても今後本格的な調査が必要である。

著作権継承者金井和郎氏（萩原恭次郎次男）に、資料の撮影・翻刻・公開に関する了承をえた上で着手する。

1920年代アヴァンギャルド関係図書資料の収集

萩原恭次郎および、それと関連のある萩原朔太郎、平戸廉吉、草野心平ら詩人関係の他、未来派・立体派、雑誌「マヴォ」関係を資料収集対象とする。これらによってタイポグラフィの概念の広がりや深度を同時代の文学・美術作品から定位する。また、同時期のプロレタリア文学・文化運動におけるタイポグラフィ概念の使用実態を比較研究することが重要である。

印刷制度史・近代日本版画にかんする情報収集

タイポグラフィの概念は一義的ではない。萩原恭次郎のように、タイポグラフィの攪乱とも呼びうる破格の構成は、こうしたタイポグラフィの正統とどのような位相においてどう異なるのか。日本の本木昌造にはじまる活字活版印刷については多くの研究があり、また印刷博物館などで保存展示もおこなわれている。これらの成果を十分に利用して効率的に研究を進めたい。

岡田龍夫に関する基礎事項調査

岡田龍夫は、雑誌「MAVO」を契機として萩原恭次郎の詩集『死刑宣告』の装丁に加わったと考えられる。その芸術性は高く評価されているものの、全体像は不明であり、調査の範囲、要する時間ともに確定しがたいが、文学研究の立場からおこなわれる本研究では、岡田龍夫にかんするあらゆる文献資料の発掘を最重要の課題と捉え、芸術観や思想的立場を明らかにすることを第一とする。

本研究は、いくつかの領域にまたがりながらも、その谷間となってきた部分の研究であるため、特に研究協力員とも連携しつつ効率的かつ慎重に進める必要がある。先行研究者との情報交換は積極的におこない協力を求める。

4. 研究成果

日本の活字活版印刷の歴史のなかに、『死刑宣告』のタイポグラフィを位置づけ、その価値を検証した。とくに、視覚メディアが現在ほど発達せず、もっぱら印刷物をとおして情報伝達がおこなわれていた明治から大正期にかけての伏せ字の歴史に注目し、そのメタ・クリティークとして『死刑宣告』が成立している点をあきらかにした。雑誌論文の

1920年代の前衛芸術運動やアナキズムの動向をふまえながら、特にプロレタリア詩人中野重治と萩原恭次郎との関係性を新資料も用いつつ具体的にあきらかにした。従来両者は思想的に対立関係にあるとみられていたが、長年にわたっての影響関係があきらかになり、特に中野の初期の詩論からは『死刑宣告』にたいする強い関心をあつづけることができた。雑誌論文の

2010年3月1日、2日に、シンポジウム「プロレタリア芸術とアヴァンギャルドせめぎあう「物」と「身体」の1920 - 1930年代」を立命館大学で開催した。本シンポジウムには、木股知史、滝沢恭司、波瀾剛、野本聡、足立元、佐藤洋、牧野守、アンドレ・ヘイグ、楠井清文、雨宮幸明、村田裕和が参加した。また同時開催として、企画展示「小型映画の芸術 プロキノと能勢克男の時代 1927 - 1937」および上映会「プロキノと能勢克男の時代 1927 - 1937 ドキュメンタリーとアヴァンギャルドの越境」を開催した。

この企画では文学・美術・映画における技法的共通性や問題意識の連続性をプロレタリア芸術とアヴァンギャルド芸術を越境させながら考察した。

上記のシンポジウムでの報告をあらたに論文化し、雑誌特集として刊行した。

の掲載誌がその特集号にあたる

2010年12月5日、上映会「能勢克男全作品」を開催した。研究協力員雨宮幸明氏に加え、藤井祐介氏、佐藤洋氏の3名による解説および研究報告を付し、能勢克男作の全映画作品を上映した。

単著『近代思想社と大正期ナショナリ

ムの時代』(双文社出版)を刊行した。本書では、萩原恭次郎へと接続する大正期のアナキズムとナショナリズムの相克をテーマとした。

～ 以上の研究では、第一に、萩原恭次郎の活動を、プロレタリア芸術の歴史に位置づけることをおこなった。しかしそれは同時に、プロレタリア芸術という領域を再認識する必要性を生み出した。シンポジウムを開催し、多数の研究者とジャンルを越えて交わる中で明らかとなったのは、従来、文学・美術・映画などのジャンルごとに区切られてきたプロレタリア芸術の領域はきわめて広く、マンガ・写真・音楽なども含めると、まだまだ未知の領域を多く残しているということである。そしてまた、ここでいう「プロレタリア芸術」という名称も今後十分吟味をし、定義していかなければならないことも判明した。少なくともそれは、イデオロギー的な求心性によって押し量られる歴史上の運動体といったものではなく、個々の作品制作者たちが社会と関与するときのその過程と技法として把握すべきものであると考える。今後、1930 - 50年代へと対象を移しながら、新たに研究プロジェクトを創設していくこととなるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

村田裕和、首のない体 / 字面のない活字印刷術総合運動『死刑宣告』の身体性、立命館言語文化研究、22(3)、65-79、2011

村田裕和、交差する詩精神 萩原恭次郎『死刑宣告』と中野重治「驢馬」所載詩論、論究日本文学、90、1-19、2009

村田裕和、中野重治・萩原恭次郎往復書簡をめぐって、梨の花通信、56、11-17、2009

[学会発表](計0件)

[図書](計1件)

村田裕和『近代思想社と大正期ナショナリ

ズムの時代』(双文社出版、2011)

〔その他〕

『立命館言語文化研究』、22(3)、2011

特集「プロレタリア芸術とアヴァンギャルド」刊行

6. 研究組織

(1) 研究代表者

村田 裕和(MURATA HIROKAZU)

立命館大学・文学部・助教

研究者番号：10449530